

令和2年度茨城県農泊推進モデル事業実績報告書



令和3年3月5日

一般社団法人茨城県観光物産協会

(一社)茨城県観光物産協会では、茨城県農林水産部農村計画課より委託を受け、「令和2年度茨城県農泊推進モデル事業」を実施いたしました。今回設定されたモデル地域は、「笠間市」と「茨城町」です。

農泊は、「日本ならではの伝統的な生活体験と非農家を含む農村地域の人々との交流をしむ農山漁村滞在型旅行」であり、農山漁村に旅行者を呼び込み、地域の所得向上を図るものとして注目されています。新型コロナウイルスの感染拡大で観光需要が冷え込み、特にインバウンドの見通しが立たない中、地元・地域で安全に過ごす旅として「マイクロツーリズム」が提唱されていますが、農山漁村の魅力を体験できる農泊は、県内の観光の内需喚起を行っていく上で重要なツールとなり得えます。

そこで、現在は「体験」に重点をおいた「コト消費」が主流となっておりますが、今後はその時・その場でしか味わえない時間を共有することを楽しむ「トキ消費」へ変化していくことから、農村生活における当たり前の日常生活を、より魅力ある体験としてコンテンツ化し、新しい農泊推進の生活スタイル・文化をご提案させていただきました。

テーマ

(笠間市) 笠間歳時記～農泊×コト消費×トキ消費

(茨城町) 涸沼水鳥・湿地センター(仮称)設置に向けた
体験コンテンツブラッシュアップ

実施事業一覧

【勉強会開催】

■笠間市 第1回笠間歳時記勉強会
日時：令和2年10月5日（月）
場所：笠間市地域交流センターともべ談話室

第2回笠間歳時記勉強会
日時：令和2年12月3日（木）
場所：井筒屋会議室

■茨城町 第1回茨城町勉強会
日時：令和2年11月17日（火）
場所：茨城町内各所・茨城町役場会議室

第2回茨城町勉強会
日時：令和2年12月15日（火）
場所：茨城町駒場庁舎講座室

【モニターイベント】

■笠間市 第1回笠間市モニターイベント準備会
日時：令和2年11月19日（木）
場所：黒澤永之亟

第1回笠間市モニターイベント
日時：令和2年11月28日（土）～29日（日）
場所：黒澤永之亟

第2回笠間市モニターイベント
日時：令和3年1月30日（土）、31日（日）

※新型コロナウイルス感染拡大により中止

<実施内容>

○笠間歳時記コンテンツの洗い出し

冬の時期における、自分たちにとっては当たり前前の食や文化を洗い出した。

凍み大根、たくわん、切り干し大根、ゆず巻、ゆずジャム、原木しいたけ、そば脱穀、甘酒、味噌仕込み、鮭もち、大根収穫 など

ターゲットは、「ていねいな暮らし」や、農体験に興味のある首都圏在住の3~40代ファミリーとした。

○第1回モニターイベントについて

洗い出したコンテンツの中から、時期的なこと、講師を付けられることなどを考慮し、「大根収穫」、「ゆず巻」、「甘酒」を体験コンテンツとした。また、1日を通しての体験のため、昼食を用意することとした。

開催日 : 令和2年11月28日(土)、29日(日)

開催場所 : 黒澤永之丞

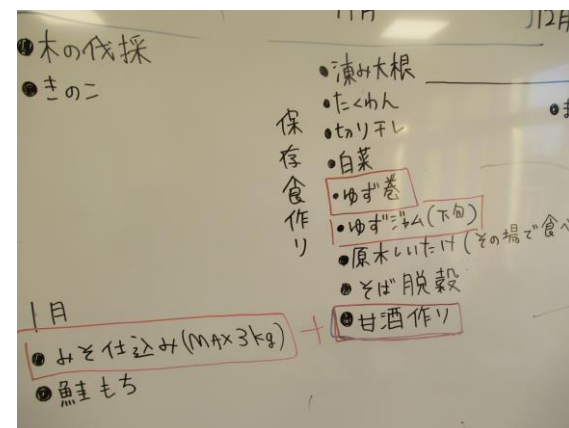
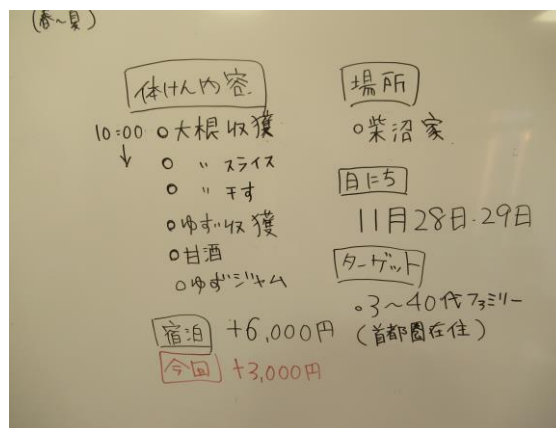
募集人数 : 8名

告知方法 : 観光いばらき、Facebookイベントページ、Twitter

<今後の展望>

今回造成した商品内容及び価格設定が、今後自分たちで「笠間歳時記」として販売していくうえで妥当かどうかを、モニターイベントを通して検証していく。

最終目標として、笠間市に移住、笠間市に年間を通して訪れてくれる人を増やすという認識を共有した。



<実施内容>

○第1回目のモニターイベントの振り返り

モニターアンケートや収支報告などをもとに、実施内容の振り返りを行った。体験の提供については、人の配置や役割分担などの課題を抽出した。また、体験内容のストーリーづけやコロナ対策についても、メンバーで認識を共有した。

○第2回モニターイベントについて

「味噌仕込み」、「塩麴作り」、「けんちん汁作り」を体験コンテンツとした。

笠間歳時記として通年体験を定着させていきたいという認識を共有した。また、今回も、1日を通しての体験のため、昼食を用意することとした。

ターゲットは、茨城県在住の「ていねいな暮らし」や、農体験に興味のある方とした。

開催日 : 令和3年1月30日(土)、31日(日)

開催場所 : 畑岡邸

募集人数 : 8名

告知方法 : 観光いばらき、Facebookイベントページ、Facebook広告、
Twitter

<課題及び今後の展望>

体験について今後は、どこの場所でもできる共通の体験を磨き上げる必要がある。

民泊に来るお客様には「田舎暮らし」「人の密度がない敷地」などが重要であるため、今後はスタッフ数配置の検討が必要。



<実施内容>

外部講師3名を招き、広浦漁港や涸沼自然公園など主要地の視察を行った。広浦漁港での漁業体験については、ひろうら田舎暮らし体験推進協議会のメンバーによる漁業体験であり、涸沼では昔ながら「手採りカッター漁」という、現在では大変珍しい昔ながらの漁法や、笹浸という竹箒の穂先のような道具を使用した漁など貴重な漁業体験の視察を行った。

茨城町内にある食事処「うおふね」では涸沼で釣った魚を調理して提供してもらえるサービスなどを行っており、涸沼を活用した商品造成になりうるコンテンツとなりうる。

涸沼自然公園では大手のキャンプメーカーなどとコラボしてのイベントを実施しており、今後も様々な活用が期待される。

廃校となった広浦小学校の今後の利活用については、校庭を利用した野菜収穫体験や小学校内にひろうら田舎暮らし体験推進協議会の事務所を設け、拠点として活動していきたいと説明があった。

現地視察後の意見交換会では講師からは、「ここは特別なんだと思わせること」、「素晴らしいコンテンツが多い。若い人がビジネスしていけるような地域作りの重要性」などアドバイスがあった。

また、茨城町が川崎重工創設者の生誕地であることが新たなコンテンツになるのではと盛り上がった。

<課題及び今後の展望>

今後コロナ禍で事業を継続していくための世代交代の問題や、安定的な収入を得るための仕組み作りが急務。



<実施内容>

農泊の受け入れをしている「ひろうら田舎暮らし体験推進協議会」や茨城町役場の方々向けに、前回の意見交換会での外部講師3名による勉強会を開催。

株式会社JTB水戸支店地域交流事業営業担当課長の山原氏

「茨城町の魅力、深堀のススメ」と題して、旅行会社からの視点で全国事例を参考に今後のコロナ禍における具体的な取り組みについての講演。

グローバル観光戦略研究所株式会社代表取締役の松本氏

「地域と交流の関係」と題して、海外との交流事例や他県の農泊事例についての講演。

一般財団法人都市農山漁村交流活性化機構次長の花垣氏

「受入地域によるポストコロナにつなげる取組事例の紹介」と題して、コロナ禍における農泊民泊の現状や今後のポストコロナにおける取組を学ぶ講演。

<課題及び今後の展望>

茨城町の農泊については、今後より一層の教育旅行プログラムの拡充を図っていききたいという思いがあるため、コロナの収束が見込めない中でいかに他の地域より特化した教育旅行の受け入れができるかが課題。涸沼の潜在的なポテンシャルを活かし、環境教育やSDGsの視点を盛り込んだ体験プログラムの構築が有用との意見が出されたことから、今後の検討課題としていきたい。

オンラインを活用した事前学習後に、現地での密にならない体験学習を実施（農泊）し、現地での体験学習後にオンラインを活用した発表会などを実施することも、今後の農泊＝教育旅行では必要。

オンラインシステムを活用した新たな農泊の取組みについては、今後検討。



<実施内容>

新型コロナウイルス感染症対策として、受付時の検温、アルコール消毒、いばらきアマビエちゃんへの登録、マスク着用を参加者をお願いした。

各体験時も密にならないよう常にソーシャルディスタンスの徹底を行い、体験時に使用する備品関係のアルコール消毒、換気などもその都度行った。

イベントのスケジュールもほぼ時間通りに進めることができ、アンケート結果のとおり参加者の満足度も高かった。

地元メンバーも、自分たちの当たり前前の暮らしが来訪者にとっては楽しいコンテンツとなると、今回のモニターイベントを通して強く感じたようであった。

コロナ感染対策について、参加者からもしっかりして対策がされており安心した、と高く評価された。次回のツアーでも引き続き徹底。

<課題及び今後の展望>

1日目昼食後の過ごし方、チェックインまでの過ごし方、宿泊場所での過ごし方を事前に通知してほしいとの声もあった。2回目はこの課題を改善していくとした。



地域の宿泊情報や体験コンテンツ等をマイクロツーリズムの視点から広くPRするため、観光情報サイト「観光いばらき」において「農泊・民泊紹介ページ」を作成した。



○令和3年2月19日（金）に公開

○アクセス数（3月1日現在）

- ・TOPページ：101セッション、300PV
- ・笠間市ページ：36セッション、163PV

今後、農泊できる場所・地域が増えた際には、順次紹介ページを増やし、より一層の農泊推進を図っていく。

■新型コロナウイルス対策について

※今回のモニターイベントの実施にあたり、下記のとおり新型コロナウイルス感染症対策を実施いたしました。

①モニターイベント参加時（屋外）

- ・受付前に検温と体調不良の有無を確認する
- ・マスク着用、手指消毒をお願いする
- ・「いばらきアマビエちゃん」への登録をお願いする

②イベント時

※大根収穫（屋外）

- ・密にならないよう間隔をあけて大根収穫をする
- ・体験時もマスク着用
- ・大根収穫後も手洗い、うがいをお願いする

※昼食（屋外）

- ・食事以外時はマスク着用をお願いする
- ・食事時の会話も極力控える
- ・料理を提供する際にスタッフはビニール手袋・マスク着用する
- ・食事に使用した器などは、提供後にまとめて回収する
- ・雨天時は室内となる為、窓をあけ充分換気する。部屋に入る人数を制限する

テーブルは飛沫防止のためできるだけ2m（最低1m）以上間隔を空けて座れるように工夫し、テーブルはこまめに消毒する

※甘酒作り（屋外）

- ・密にならないよう間隔をあけて体験をする
- ・体験時もマスク着用
- ・甘酒の回し飲みはしない
- ・雨天時は室内となる為、窓をあけ充分換気する。部屋に入る人数を制限する

テーブルは飛沫防止のためできるだけ2m（最低1m）以上間隔を空けて座れるように工夫し、テーブルはこまめに消毒する

③宿泊（室内）

- ・参加者がこまめに消毒を行えるように、施設内の共用部各所に複数のアルコール消毒を設置する
- ・共用部の利用時に参加者同士が密になっている場合、スタッフから適当な距離を確保するように声を掛ける
- ・同居者以外との相部屋は避ける。2組の場合、離れた部屋に宿泊する
- ・食事以外時はマスク着用をお願いする
- ・食事時の会話も極力控える
- ・テーブルは飛沫防止のためできるだけ2m（最低1m）以上間隔を空けて座れるように工夫し、テーブルはこまめに消毒する
- ・料理を提供する際にスタッフはビニール手袋・マスク着用する
- ・食事に使用した器などは、提供後にまとめて回収する
- ・1人ずつ入浴時間を設定する
- ・タオルなどの入浴セットは各参加者で用意する
- ・更衣室、トイレなど共有部分はこまめにアルコール消毒する

④ゆず巻き作り（室内）

- ・密にならないよう間隔をあけて体験をする
- ・体験時もマスク着用
- ・瓶は煮沸消毒する
- ・各自が使用する備品もこまめに消毒し、他の人のものを使いまわししない
- ・窓をあけ充分換気し、部屋に入る人数を制限する

- ・茨城新聞（令和3年1月1日）に今回の茨城県農泊推進モデル事業にて実施したモニターイベントが掲載。



コロナに負けるな

おもてなし向上へ



新型コロナウイルスの影響で苦境に立つ観光産業。とりわけインバウンド（訪日外国人客）需要の激減は、旅館やホテルなどの宿泊施設に大きな打撃となっている。こうした中、「コロナ禍をおもてなしの質を高める好

田舎暮らしの魅力磨く 笠間の農家民泊

機」と捉えるのが、笠間市内で農家民泊を営む柴沼淳さん(44)だ。「宿泊客は減ったが、仕事を一つめ直す貴重な時間があった。厳しい状況の今だからこそ、田舎暮らしの素晴らしさをしっかりと提供したい」と前を向く。

柴沼さんは高校を卒業して民間企業に3年間勤めた後、20代半ばから約15年間、台湾の液晶メーカーに勤務。帰国後は一念発起して、同市淵野辺にある築90年の母方の実家を改修し、2017年から民泊を始めた。

祖父の名「黒澤永之丞」を冠した古民家は朱色のトタン屋根が印象的で、周囲の穏やかな里山に溶け込む。農家独特の造りは堅牢さが際立ち、玄關土間奥にしっかりと囲炉裏が郷愁を誘う。

「うちは過度な宣伝はしていない。お客さんは笠間ではなく、この古民家を探し当ててやって来るとです」と柴沼さん。「旅慣れた外国の方は有宿泊客と「響く」の作業をする柴沼淳さん(左)＝2020年11月13日、笠間市池野辺



農泊ツアーで里山暮らしの醍醐味を語る柴沼淳さん(奥左から3人目)＝2020年11月28日、笠間市池野辺

近場で安全に過ごす旅として「マイクロツーリズム」が提唱されている。県も、この流れに対応するため、農山漁村の生活を体験する滞在型旅行「農泊」に注力。地域資源を生かした体験型商品を開発したり、受け入れ体制を整備して、農泊のモニターツアーを始めている。

昨年11月に実施した1泊2日のツアーでは、柴沼淳さんが営む民泊「黒澤永之丞」が活用された。NPO「笠間の魅力発信隊」理事長の大坪桂さん(66)らの協力を得て、東京や千葉などから訪れた3組6人が、笠間の里山の暮らしを楽しんだ。

体験メニューは、野菜の収穫をはじめ、タイコンとユズを素材に

農泊ツアーに活用

収穫や伝統食作り体験

した「ユズ巻き」など地域の伝統食作りを習った。甘酒作りでは、庭先にかまどが設けられ、まきの煙と格闘しながら火加減を調整した。完成後、参加者は甘酒を手にとり、自然に寄り添う暮らしの醍醐味をアビールした。

千葉市川市から妻と訪れた会社員の夫(50代)は「農泊は初体験。自分も東京の西部の出身なので笠間には違和感がない。機会があったらまた参加したい」と笑顔。

ツアーを企画した農山村計画課は「柴沼さんの民泊の質の高さに参加者からは好評を頂いた。田舎暮らしに関心のある方がリーダーになるよう今後も取り組みたい」と振り返った。

名な観光地には飽きていて、ここでいるような、昔の普通の田舎暮らしの魅力を感じている」と誇らしげに言う。

柴沼さんが大切にしているのが、宿泊客とのコミュニケーション。予約時に十分に打ち合わせをし、「何をしたいのか」「どこに連れてってほしいのか」などを聞き取り、信頼関係を築くのだという。

昨年はコロナ禍で春先から台湾を中心にインバウンドが途絶えてしまった。だが、山林の手入れや、家屋の修理、農作業の準備など仕事は切れることはなかった。一方、接客の時間が減ったことで、民泊の在り方、客のおもてなし方を見直す機会にもなった。

夏休みごろから家族連れを中心に客足は回復。シーズンオフの冬でも週末には、東京、神奈川県などから団体や個人の予約が入る。宿泊客はこの時期、こまめにやり取りや、菓子の余分な部分を取り除く「菓すべり」などを体験するところ。

柴沼さんの元には時々、かつて宿泊した海外の方から激励のメールが届く。「力になるよ、感謝の気持ちで、今やれることに集中したい」とほほ笑んだ。

(沢畑浩一)

- ・今回のモニターイベントの参加者より、すぐに1月の宿泊予約があった。
- その際、デザイナーやアーティストが宿泊し、農泊の魅力が高く評価され、さらに春の予約2件へとつながった。

今回、農泊推進モデル地域として茨城町と笠間市を掘り下げていった中で、それぞれの地域で求める未来像が違うことが分かった。

茨城町

涸沼という豊かな資源を活かし、漁業体験をメインとした教育旅行の推進をしていく。新型コロナウイルス収束の見通しが立たない中、マイクロツーリズムが提唱されていることを追い風に、農泊を含んだ「ここだから体験できること」を具体的に詰め、県外との差別化を図っていきたいところ。

笠間市

来訪目的が観光ではなく人に会いに来ること。その為のきっかけとしてモニターツアーを実施したことで、価格は妥当であるか、自分たちの“暮らし”が体験として満足できるコンテンツになるのかなど、今後地域団体が自走するためのフレームワークを作ることが出来た。

最後の事業である1月末に予定していた2回目のモニターツアーが県内での新型コロナウイルス拡大による緊急事態宣言により、やむを得ず中止となったが、自走の手助けができるよう、連携を図っていく。